



牛深漁業の変遷

著者	林 敏容
雑誌名	周縁の文化交渉学シリーズ8 『天草諸島の歴史と現在』
ページ	195-206
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/6217

第1章 牛深漁業の変遷

林 敏容

はじめに

周知のように、天草諸島は海に囲まれ、豊富な水産資源に恵まれている。とりわけ、天草の牛深は熊本県の有数の漁業基地となっている。牛深港は全国トップクラスの漁港とは言えないが、昭和24年（1949）のイワシ景気では水揚げ量が全国第2位であった。

牛深港は天草下島の南端にあり、漁業水産資源豊かな漁場に囲まれている。北面を除く三方を海に囲まれ、天然の深い入り江があつて港内の水深は深く、前面に下須島を抱き天然の良港を形作っているため、船は出入りが自由であつたことから物流の拠点として、天草最大規模の漁港を誇り、近海漁業を中心に発展してきた港であつた。漁業・水産ではイワシ、サバ、アジおよびタイが獲れる。いわゆる牛深港は天草の重要な漁業基地であり、漁業が主要な産業の一つといえよう。

しかしながら、近年は漁獲量の減少と人口高齢化による漁業従事者世帯数、漁船隻数ともに減少している。これは非常に深刻な問題になっており、天草市や牛深の地域住民において真剣な対策が講じられている。牛深は、近世以来漁業集落として発展してきた。本稿では、牛深漁業の変遷を振り返り、江戸時代、明治時代から大正時代、戦前から戦後まで、平成という四つの時期を分けて考察してみたい。

一、江戸時代の牛深漁業の発展

（一）定浦制度

寛永14年（1637）、天草四郎を総大将に決起した天草島原の乱では、多数の島民が犠牲になり天草の人口は激減した。天草島原の乱後、鈴木重成の「天草亡所開発仕置」による村落再編は、近隣諸藩からの移民導入によってすすめられ、幕府は直ちに移民政策を敢行し、寛永19年（1642）薩摩と肥後から多数の人々が移住させられた。天草が幕府の直轄地である天領となり、漁業は定浦制度のもとで営まれた。実施初期に天草87カ村の内、海に沿った村60あまりの中から7カ浦に限り、「水手役及漁方運上ヲ課シ七浦ニ限り海面ヲ専有シテ業ヲ営ム…」という制度を定め、正保2年（1645）牛深に弁指定浦の制を設けた。『熊本県漁業誌』には、定浦制度について記録されている。

…万治二年（1659）代官鈴木伊兵衛検地ノ際郡高二万千石ノ内浦人分九百六十五石式斗六舛八合ヲ差引残高二万三十四石七斗三舛ニ高役分トナリ更ニ定浦大多尾二間戸樋ノ島高戸大道御所浦中田大

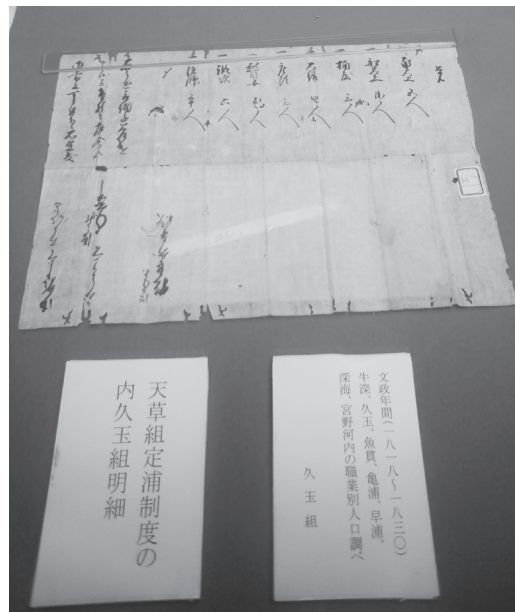
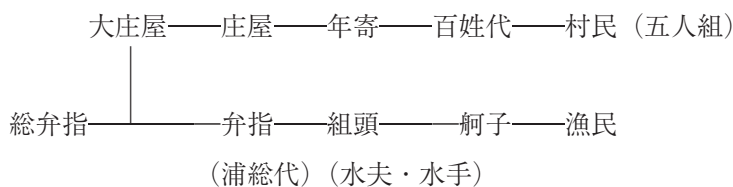


写真1 天草組定浦制度の内久玉組明細
出典：うしぶか海彩館展示（筆者撮影）

江亀川ノ十ヶ村ヲ増シ惣数十七ヶ村トス…¹⁾

万治2年（1659）天草を統轄する幕府代官鈴木重辰の頃には、もとの10カ浦から17カ浦に増やし、漁民の管理と浦高の徴収をした。この制度を確実に実施するために、定浦の人々でなければ、本格的な漁業を営むことを許さなかった。そのため定浦漁民は自己の専有漁場を所有することになる²⁾。いわゆる定浦以外の村々は漁業に従事できなかったのである。このような制度が確立した後、漁村が成立する契機となり、重要な漁村集落を形成している。定浦制度を確実に実施するために、各地区の正確な職業別および人口調査は欠かせない。写真1は、うしぶか海彩館に展示されている天草組定浦制度の内久玉組明細で文政年間（1818～1830）牛深、久玉、魚貫、亀浦、早浦、深海、宮野河内の職業別人口調査の内容である。

*元禄年間（1680～1690）の漁業制度³⁾



1) 『熊本県漁業誌』第一編下（明治23年刊の複製）、本渡：天草の民俗と伝承の会、1972年、41頁。

2) 北野典夫『天草海外発展史』下巻、葦書房、1985年、8頁。

3) うしぶか海彩館展示より。

総弁指：天草郡に1人。富岡町の船津中元氏が世襲。御用船の指揮、漁場の統括にあたった。

弁指：各浦々に1人。漁業の統制と税の取り立てを行う管理者。

舸子（水子役）：御用船の運転。平時は海上輸送に携わるかわりに、漁業に従事することを許可されていた。

当時の長崎奉行への上納品はカツオブシ、トサカグサ、トコロテングサなどであった。その内、カツオブシは宝永4年（1707）牛深にてカツオ漁が始まったことをきっかけに、享保年間（1716～36）に定浦牛深の中嶋屋（緒方）惣左衛門が開発したとされる。このカツオ一本釣りの漁法はやがて10数人が乗り込むカツオ船へと発達したが、あいつぐ海難事故によって次第に衰微した。

（二）牛深港の貿易

江戸時代の牛深港は海運の要地であり、年貢の積出港として利用され、大阪と長崎、薩摩、琉球への海上運輸の中継地点として繁栄した。また外国船との密貿易の港にもなった天草と、当時唯一中国と西洋向けの開放港だった長崎港はほぼ同緯度の位置するため、唐船の漂着や寄航事件が見られた。濱名志松氏が「天草近代年譜」（松田唯雄著）で調べてみると、天草西海岸の崎津に3回、牛深に2回漂着することがあったが⁴⁾、松浦章氏の「江戸時代後期における天草崎津漂着唐船の筆談記録」⁵⁾の江戸後期天草に漂着した長崎来航唐船一覧には、天草牛深に漂着した唐船は7隻があった。牛深港は天草の対外貿易の港だけではなく、漂着した唐船に対して処置することも必要であった。そのため、幕府の遠見番所が設置され、密貿易の取り締まりと外国船が漂着した際の処理を行った。

商船が常に牛深に碇泊することは『近代天草漁業史料集成』に、「…湾口三丁式拾間周囲凡式拾丁潮ノ干満シ係ラス船舶ノ出入自由ナルカ故ニ商船常ニ碇泊シ人家稠密一小市街ヲナシ海運頗ル便ナリト雖モ道路縈迂嶮悪飼ニシテ…」⁶⁾と記されている。写真2は「天草牛深町を中心せる名勝図絵」で、いくつかの船舶は牛深港に碇泊あるいは寄港が見られる。

幕府の統治下、国策である俵物——海鼠（ナマコ）、鮑（アワビ）の増産に力を入れるよう漁民に命令した。また、海参・鮑・翅（フカヒレ）の三種が、中国では中華料理の高級食材として知られている。当時、中国側はこの三つ高級食材の需要が多く、それこそナマコ、アワビなどは幕府にとって非常に重要な貿易品であった。なぜなら天草産の俵物は品質の点で評判が高く、また中国料理に最適との評判がよく、第一級品として高値で取引され、それを俵詰めにして長崎から出航する唐船の重要な貿易商品の一つとなった。このような輸出貿易は、明治維新以後も自由貿易の形式で行われている⁷⁾。以上のような環境で牛深の人々は外国からの漂着民の受け入れや海を知るという地域の個性を生かした。

周知のように、牛深港は江戸時代から九州地方の長崎や薩摩の中継港として船の往来が盛んであったため、帆船は牛深に寄港し、ここで宴の酒盛り、風待ち、しけ待ちの船乗りたちで賑わっていた。江戸

4) 濱名志松編『天草海上交通史』、1997年、48頁。

5) 松浦章「江戸時代後期における天草崎津漂着唐船の筆談記録」『周縁の文化交渉学シリーズ2 天草諸島の文化交渉学研究』115～138頁。

6) 五和町史編纂委員会編『近代天草漁業史料集成』、五和町教育委員会、1996年、220頁。

7) 北野典夫前掲書、20頁。



写真2 弁財船の積み荷

出典：うしぶか海彩館展示（筆者撮影）



写真3 天草牛深町を中心せる名勝図絵

出典：うしぶか海彩館展示（筆者撮影）

時代後期に牛深で誕生したハイヤ節⁸⁾は、船乗りたちによって全国に伝わり、各地で歌われるようになる。きっかけは弁財船といわれ、民謡に影響したといわれている。上述のように、弁財船によってハイヤ節は全国各地で展開されるが、江戸時代の経済を飛躍的に発展させた海運の主力である弁財船を中心に、日本国内の海運貿易を支えていた重要な船であった。一般に弁財船の満載吃水は地方、時代あるいは用途によってそれぞれ異なって、一般の廻船の場合深い吃水を取り、できるだけ大量の貨物を輸送しようとした⁹⁾。弁財船は、船底に重い物を積んで船の重心を下に持ってきて、船を安定させるように船底に石、瓦など重い荷物を置く、他の積荷は酒、しょう油、米、米穀、塩、綿などの生活物資を輸送する。このような海運貿易により、各藩の産物は流通に乗って日本全国へ届けられ、各地域の需要を充たすようになった。

二、明治時代から大正時代の牛深漁業の推移

明治時代に入り、牛深の漁業は江戸時代と比較すると多少変わった。『熊本県水産誌』巻之五には、牛深村に関する漁業沿革は以下のように記録されている。

正保二年（1645）二本郡富岡町牛深村崎津村二江村佐伊津村御領村…七ヶ村ヲ定浦トシ漁方運上ヲ徳川政府ヨリ課セテ濫觴シ由リ明治七年（1874）ニテハ具慣行ヲ襲シ漁場区域トスルハ東宮野河内村八幡瀬ニ至ル五里西北ハ魚貫村魚貫崎ニ至ル…明治八年（1875）ニ至リ漁場ノ制限ノ令シ従リ頓シ漁業退歩ノ状ヲ壊セシニ再ヒ十三年（1880）ニ至リ旧慣ニ復スルヲ以テ寝ヤ盛大ノ景況アリ¹⁰⁾。

とあり、明治8年（1875）に漁場制限の命令に従ったが、これに伴い一時漁業の景気が後退した。よう

8) ハイヤ節に関する研究は、竹内勉『はいや・おけさと千石船』、本阿弥書店、2002年に参考。

9) 小嶋良一、安達裕之、「弁財船の復原性と耐航性について」『関西造船協会誌』第234号、2000年9月、267頁。

10) 『近代天草漁業史料集成』、222頁。

やく明治13年（1880）に至って旧慣を回復した後、水揚状況は好漁が続いていた。特に、明治時代初期のカツオの一本釣りは、船型も大きくなり、およそ28人が乗り込むができ、カツオ漁の全盛期といえる。明治時代中期以後、川端屋はカツオ漁業とカツオ節の振興を促進し、大型カツオ船の改良を行い、外洋でも耐えうる大きさの船となって、遠く五島列島、平戸方面に出漁した。明治18年（1885）牛深において漁人は1,427人¹¹⁾であり、これは総人口の70%ぐらいあって当時の牛深の住民はおもに漁師だったと言えるだろう。カツオ漁の盛漁期において最も雇い人が多かったときは300人余りがいるが、明治19年（1886）に深川勇次郎が川端屋の営業を継いで経営することになった。

明治27年（1894）には、八田網によるイワシ漁業が始まり、捕漁季節は5月より10月まで、明治期から大正初期の船団数70余とあり、牛深漁の最盛期の一時期であり、明治時代中期、牛深において漁具と釣具および乾魚貯蔵法は次のようにある。

漁具 地引網 カシ網 持網 鰯網 カナキ網 烏賊網 ヤズ網 鰯網 ハチダ網
 釣具 鰹釣 万引釣 鰯釣 鰯釣 鰯釣 鯛釣 羽魚釣 鰹鯖釣 章魚釣
 乾魚貯蔵法

毎年一二月ヨリ一月漁鰯鰯其他魚類ヲ頭ヨリ脊部ニ掛ケ両断シ鰹骨ト腸ヲ去リ食塩ヲ施シ二日間桶中ニ填メ塩汁ニテ洗上竹筴ニ排列レ二日或ハ三日間乾燥シ塩菴ニ裏ミ貯フ¹²⁾

牛深において漁師の漁撈形態や漁撈方法は、さまざまな手段があり、人間と漁業の関わりとともに、原始的な形態や仕掛けをもつものから、不断に進化を遂げてきた。漁具、漁船などの改良、改造によって、漁獲量が増加し、漁船の遭難事故が急激に減少した。カツオ業発展に多大な貢献をした深川氏一族の事績は以下のようにある。

深川氏ハ天草郡中著名ノ漁家ニシテ鰹魚ヲ以テ專業ト為ス其今日ノ隆盛ヲ致セシ所以テ聞クニ祖父五十三郎最モ漁事ニ熱心シ刻苦經營ノ余多少ノ資ヲ貯ヘ始メテ鰹釣船ヲ造リ又匣テ網罟数張ヲ製シ家業漸ク盛運ニ赴ケリ其子卯三郎ニ至リテハ資産大ニ増殖シ鰹船十一艘鰹船十七艘ト為シ一層其業務ヲ拡張セリ卯三郎人ト為リ寛厚ニシテ慈恵ヲ好ミ又能時勢ニ通シ商機ニ熟セリ故ニ其為ス悉ク機ニ投セサルナク一時巨額ノ資金ヲ得タリ……¹³⁾

従来、深川氏は牛深において有名な漁家であり、とりわけカツオ漁を専業として営んでいた。深川五十三郎は最も漁事に専念し、鰹（シイラ）釣り船を作り、また網罟（もうこ）を製造し、彼の努力により家業が盛んになった。息子卯三郎に至って、カツオ船11隻、シイラ船17隻を所有した。その上、時勢に通じていたため商機をつかむことができ、一時は巨額の資金を得た。深川氏一族は水産事業開拓に熱心に

11) 『近代天草漁業史料集成』、256頁。

12) 『近代天草漁業史料集成』、221頁。

13) 『熊本県漁業誌』第一編 下（明治23年刊の複製）、2頁。

取り組み、漁具や漁船を改良し、また鰹漁業を拡張して鰹節の改良製造もした。彼らの功績は大きく評価され、熊本県沿海各郡漁業組合聯合から功勞褒状を受けた。写真4は深川勇次郎の功勞褒状、その功勞褒状の内容は以下のようにある。

功勞褒状

熊本県天草郡牛深町

一銀盃

壹個

深川勇次郎

祖先ノ遺業ヲ継キ熱心水産事業ニ従事シ多ク資産ヲ抛チテ漁具漁船ヲ改良シ且地方漁民ヲ扶助誘掖シテ大ニ鰹漁業ヲ拡張シ鰹節ノ改良製造ヲ実行スル等始終一貫専ラ力ヲ水産事業ノ發達ニ盡ス其功勞嘉ミスルニ足レリ因テ特ニ之ヲ賞ス

明治三十二年十二月三日

熊本県沿海各郡漁業組合聯合

水産品評会長正七位倉山昌親 印

明治36年（1903）には牛深町漁業組合を設立した。『熊本県之水産』には牛深町漁業組合について、以下のように書いている。

県下の代表的漁業組合として牛深町漁業組合に就き其の大要を述ぶる所あるべし本組合は明治三十六年八月の設立にして組合数六百を超え、組合長深川卯次郎氏は曩に農商務大臣の選奨を受け、組合共同一致の美風見るべきものあり、隣村久玉村魚貫村漁業者等との関係亦円滑にして相依相助の実挙りつゝあり就中其の共同販売事業は範とするに足る該事業は大正四年七月一日の開始にして之が実施当初種々の今年に遭ひたるも組合幹部が万難を排して事業の遂行に努めたと事務員が組合員及仲買人に対し懇切能く其の業務に精勵したる為め事業着々好況を呈し…¹⁴⁾

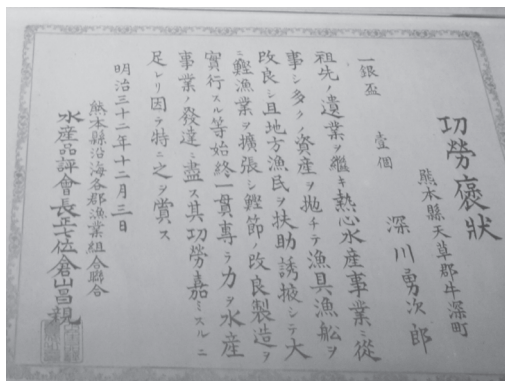


写真4 深川勇次郎の功勞褒状
出典：うしぶか海彩館展示（筆者撮影）

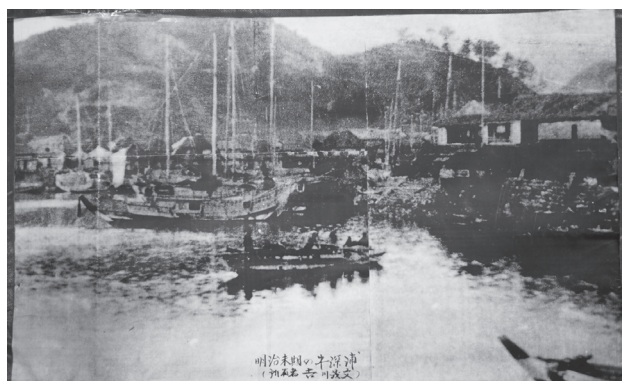


写真5 明治時代末期の牛深浦（原所有者・吉川茂文氏）
出典：うしぶか海彩館展示（筆者撮影）

14) 熊本県水産組合『熊本県之水産』、1919年、142～143頁。

とあるように。牛深町漁業組合を設立した後、さらに進歩し発展を続けていた。明治40年（1907）にイワシ漁業を主幹とし一本釣、はえ縄漁業などの沿岸漁業を発展させ¹⁵⁾、同44年（1911）には牛深において初めて30トンの蒸気船2隻がカツオ船として進水し、カツオ漁シェアの7割を独占した。このような様々な漁、釣具と豊かな漁業水産資源を持つ、熊本県第一の漁業基地となったのである¹⁶⁾。そして、15年（1926）に巾着網を導入し、牛深の漁業をさらに進めていた。

三、戦前から戦後まで牛深漁業の状況

牛深は江戸時代から昭和30年代まで天草諸島における海運と漁業の拠点として発展してきた。昭和7年（1932）、佐世保鎮守府参謀長が海軍省軍務局長に送った牛深港修築工事の件の通報は以下のようである。

軍務二第二八〇号 土第二、九三二号

昭和七年九月十二日

佐世保鎮守府 御中

港湾修築工事に関スル件

管下牛深港ヲ左記ノ通本県ニ於テ修築ノ予定ニ有之候貴府ニ於テ支障ノ有無御回答相煩度候別紙海図並平面図添付此段及協議候也

（中略）

位置 天草郡牛深町

工事計画 瀬崎ノ先端ニ水深五、米延長百四十米突ノ岸壁ヲ築造ス又長手ノ鼻ヨリ延長百二十米突ノ防波堤ヲ北ニ向ツテ突出築造シ堤内ノ一部ニ網干場船曳揚場、等ヲ設置ス

工事期間 昭和七年度ヨリ昭和八年度迄

備考 水路部基本水準標ニハ異状ナシ¹⁷⁾

まもなく内務省からの指示で、牛深港修築工事が開始され、一年間をかけて工事内容は防波堤、岸壁などの築造、牛深港の拡大と充実を目指して港湾施設の整備が行われた。熊本県第4291号、昭和7年（1932）11月21日、牛深港修築施行工事の内容は以下のようである。

一、工種

15) 『「天草」下島 民俗調査報告書』、熊本商科短期大学民俗学研究会、1976年、10頁。

16) 山下義満「牛深港の「みなとの文化」」、みなと文化研究事業 <http://www.wave.or.jp/minatobunka/archives/report/109.pdf> の内容による。

栗津八郎「牛深市真浦・加世浦漁業集落に関する研究」『日本建築学会研究報告・中国・九州支部』第2号、1972年3月、146頁。

17) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C05022312600、公文備考 昭和7年 J 警戒計画 卷11 (防衛省防衛研究所)。

- (イ) 防波堤ノ築造 延長百二十米
- (ロ) 岸壁ノ築造 延長九十五米 (水深五米)
- (ハ) 階段物揚場ノ築造 延長五十米
- (ニ) 取付護岸ノ築造 延長二十米 (水深〇.〇米乃至五.〇)
- (ホ) 浚渫 一万四千百八十平米
- (ヘ) 除礁 八百平米
- (ト) 埋立 二千三百五十平米

二、工事年度 自昭和七年度 至 昭和八年度

三、右工事ニ対スル所管鎮守府ノ意見 支障ナシ¹⁸⁾

昭和初期において、政府からの指示により牛深港の拡大と修築工事が行われ、その後港に係留された船の隻数が増加し、漁業および貿易に対して一定の影響を与えた。

周知のように、日本人は世界でも有数の魚食民族で、そのために漁業の発展は重要なことである。戦前世界一を誇った日本漁業は、第二次世界大戦の敗戦により、日本は広大な漁業水域の喪失、石油、漁具、漁網、漁船などの生産手段の不足、運輸と冷蔵施設の不足などにより、戦前500万トンに達した漁獲高は、昭和20年（1945）には200万トンに低落した¹⁹⁾。この頃、漁船は徴用、船員は徴兵され、漁業の従事者は一時減少した。このような現象は戦後ようやく回復したが、しばらくは燃油や漁業資材が極端に不足した。牛深は漁区の設定によってカツオ漁が衰えた。但し、戦後の食糧不足のため、海洋資源の開発が急務となり、いわゆる国の食糧増産方針と相まって、牛深の漁業は再び回復し、沿岸水域におけるまき網漁業を盛んにしていた。特にカツオの一本釣りは重要な役割を果たし、県内の一本釣漁業はほとんどが3トン以下の小型船で操業される。

昭和23年（1948）牛深港は第三種漁港を指定された。翌年にイワシ景気で、船団が漁撈を開始し、最も多い時期には7船団あり、巾着網58統、乗子2,000人で水揚げは全国第2位であった。イワシ景気に伴って、牛深の商業、水産業も発達させた。漁業の発展とともに、特に水産資源を利用した加工品が増加



写真6 炭釜「烏帽子坑」(筆者撮影)

18) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C05022312900、公文備考 昭和7年 J 警戒計画 卷11 (防衛省防衛研究所)。

19) 熊本県編『熊本県史』現代編、1964年、362頁。

表1 昭和38年（1963）牛深市場仕向け 出荷量単位 トン

	流通総量		計	生鮮向け	冷凍	加工向け	加工向け内訳	
	漁船水揚量	搬入量					ねり向け	その他の食用加工向け
牛深	21,106	5,476	26,582	9,319	—	17,263	1,670	15,593
アジ	5,853	3,185	9,038	2,004	—	7,034	1,379	5,655

出典：九州・山口ブロック水試漁業分科会編『西日本海域における一本釣漁業』、恒星社厚生閣、1972年、附表15頁引用。

表2 海区別の主漁獲魚種

海区	主たる漁獲対象魚種
有明海区（天草島沿岸を除く）	スズキ、チヌ、カレイ、ボラ
不知火海区（天草島沿岸を除く）	タチウオ、コチ、カレイ、イカ、タイ、スズキ
天草南西岸区（牛深～富岡）	タイ、ブリ、イサキ、アジ、サバ、エソ、タチウオ
天草東岸区（牛深～松島）	タイ、カサゴ、チヌ、イカ、トラフグ、タコ
天草北岸区（富岡～松島）	タイ、タコ、イカ、イサキ、アジ、カサゴ、チヌ

出典：『西日本海域における一本釣漁業』、149頁。

した。イワシ加工場はおよそ500を数え、その煙突から出る煙で港の空を暗くしたほどで、主な加工物は煮干、塩干、かまぼこなどであった²⁰⁾。当時、牛深の住民は主に漁業、およびそれに関する仕事に従事し、昭和30年（1955）の人口3万8千人がピークと認められる。しかしこのような好景気は次第に減少していく。それは漁業の衰退と炭鉱の閉山などによるものである。

牛深の漁民たちへの聞き取り調査の内容²¹⁾によれば、鯖江要氏は昭和9年（1934）に生まれ、中一年から船に乗り、漁師の人生を始める。もう一人の漁師は浅見康行氏である。彼は昭和17年（1942）に生まれ、長男であった。彼らの叙述によると、当時の漁師業は地元において高収入の職業だった。戦後に台湾干しという魚の干物の作り方が伝来した。そして盛漁期には、牛深にある水産加工場を増設した。いわゆる、男性が出漁し、主婦が別の仕事をしや水産加工場に働きに出ると状況であった。

表1は昭和38年（1963）の水産物の流通統計年報によると、牛深において地元の漁船水揚量は21,106トンがあり、他の地区から搬入量は5,476トン、合わせて26,582トンであった。その中、生鮮向けは9,319トンとなり、また地元周辺市場には8,904トン、京浜市場は208トン、京阪神市場は157トンであった²²⁾。以上のような数字からみると、牛深の漁獲は主に熊本県内において地産地消という状況、他県への搬出割合は少なかったのである。

表2からみると、牛深地域において主たる漁獲対象魚種は、タイ、ブリ、カサゴである。昭和46年（1971）に5年ぶりのイワシの大豊漁を迎えた。昭和50年代から平成初期まで漁獲制限が設けられる豊漁

20) 岩本政教等著；浅香幸雄監修『熊本県の地理』、光文館、1964年、301頁。

21) 聞き取り調査に関する他の内容は、本書所収（次章）の亀井拓「牛深と遊廓——歴史、地理、経済を中心に——」に詳しい。

22) 九州・山口ブロック水試漁業分科会編『西日本海域における一本釣漁業』、恒星社厚生閣、1972年、附表16頁。

が続くが、その後は再び不漁期間となった。また、時代の変遷や環境の変化に伴って、若者たちが地元で漁業関係の仕事に就かず、漁業就業者の高齢化や後継者不足など原因により、漁業人口が激減した。その結果、牛深の水産業は衰退の一途をたどっている。

四、平成における牛深漁業の危機とそれへの対応

現在、地球温暖化が加速しており、その影響から海水温の上昇に伴い漁業資源にも危機的状況が現れている。また、生活排水・廃棄物の流出など海洋汚染による漁業資源の減少に伴い、漁獲量が大幅に減少し、さらに魚価の低迷などにより漁業就業者が激減した。牛深も同様な問題を抱え、漁業が低迷している。しかし、観光の振興を図るために、平成9年（1997）うしぶか海彩館が建てられ、海産物の商店と飲食店、船や漁具の展示場、フェリー乗り場などの複合施設化が完成した。特にうしぶか海彩館の隣にある漁業の歴史資料展示館には、①牛深の足跡をたどる、②海の幸を求めて、という二つの特質を紹介する。また、そこで牛深の歴史、漁法、漁師の生活などの紹介、カツオ船の復元、かつての漁具などを見学できる。

もう一つの観光の活性化に向けた努力は、牛深住民の誇り、牛深ハイヤ節である。毎年4月第3金、土、日曜日3日開催される。旧牛深市は、平成4年（1992）「牛深ハイヤ節」を、市指定の無形民俗文化財に指定した。平成18年（2005）に至って、牛深市を含む2市8町が3月に合併し天草市が誕生したことにより、「牛深市民踊保存会」を「牛深ハイヤ保存会」に改名する²³⁾。牛深ハイヤ節を内外にアピールすることで、地域に賑わいを取り戻し、観光振興を進め、さまざまな経済効果をもたらすことができる。

過疎も深刻な問題である。総務省は平成20年（2008）1月25日に、平成19年度第4回過疎問題懇談会を開催した。自治体からのヒアリング、意見交換を行い、安田公寛天草市長が過疎計画の基本方針を提出した。新市建設計画に掲げた「日本の宝島“天草”の創造」という理念に基づき、都市像を実現するために、次の6つの基本方針により地域の自立促進を図る。

◆地域を担う人づくり



写真 7-1 うしぶか海彩館のいけす広場（筆者撮影）



写真 7-2 復元船（筆者撮影）

23) 「牛深ハイヤ 南風ガイドブック」参照。

- ◆快適な生活環境づくり
- ◆機能的な基盤づくり
- ◆豊かな産業づくり
- ◆魅力ある観光づくり
- ◆自然環境と共生のまちづくり

天草市役所は住民の生活を豊かにするために、さまざまな方針を提出し、漁業対策では、漁場環境の修復・保全に努め、水産加工品のブランド化、流通の拡大を図り、漁港機能の増進と漁業集落における生活環境の改善、ユニバーサルデザインの観点に立った漁港施設の整備を進めるなどを提案した²⁴⁾。こうして漁港の修繕や水産加工業の進歩により、漁港の作業環境を改善するなら仕事をしやすくなり、それに伴い、漁業の発展は次第に上向きになるだろう。漁港環境以外は、自然環境問題として解決すべき重要課題である。近年、シャットネラ赤潮による漁業被害がもたされ、漁家の経営に対して深刻な問題を与えることが懸念される。そこで、熊本県水産研究センターでは漁業者セミナーを開催した。この講座は教養コース、専門コース、沿岸地域コースと特別教室、各地域においてそれぞれ身近なテーマで開講する。天草漁業協同組合も、漁業者セミナー「牛深教室」を開催している。これは、漁業低迷が続く中、魚の魅力を知ってるもらおうと6年前に漁師仲間と教室を始めたものである²⁵⁾。講座の主たる目的は天草南部漁業の個性ある発展をめざし、基礎的な知識と最新の技術を修得することである。このような教室は、牛深の町全体に良い刺激を与えるだろう。

おわりに

牛深は水産資源の豊かな好漁場に囲まれ、従来から漁業を中心に発展したのである。江戸時代に定浦制度を実施は漁村が成立する契機となり、重要な漁村集落を形成した。それとともに牛深は密貿易の港でもあり、また大阪、長崎、薩摩への海上運輸の中継地として船の往来が盛んであった。帆船は牛深に寄港し、ハイヤ節は弁財船によって全国に広がり、伝播していった。明治初期から第二次世界大戦以前、船型を改良し、多人数で乗り込むことができ、カツオ漁の全盛期に入った。昭和7年（1932）に、牛深港の拡大と充実を目指して港湾施設の整備が行われ、海運にも盛んにしていた。第二次世界大戦の爆発は全世界に衝撃を与え、海運や漁業の発展に深い影響を与え、もちろん牛深の漁業も深刻な打撃を受け、漁船は徴用、船員は徴兵され、漁業の従事者は一時減少した。戦後、日本国内に食糧不足のため、海洋資源の開発が急務となり、沿岸水域に漁業を再開し、復興が進むことになった。昭和50年代から平成初期まで、漁獲制限が設置される豊漁が続いていた。しかし、平成に入り、海洋環境の変化および漁業就業者数の激減と伴って、不漁となった。このような状況を解決するため天草市役所、天草漁業協同組合及び熊本県海水養殖漁業協同組合は、様々な方針を打ち立てている。今後、牛深漁業が再び活気を取り

24) 平成19年度第4回 総務省過疎問題懇談会 資料《熊本県天草市》 http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/pdf/kasokon19_04_02_s1.pdf 平成19年度第4回配付資料 天草市資料の内容による。

25) 『西日本新聞』2009年8月4日付け記事を参照。

戻していくことを期待したい。

参考文献

- 『熊本県漁業誌』第一編下（明治23年刊）、本渡：天草の民俗と伝承の会、1972年複製
熊本県水産組合『熊本県之水産』、1919年
熊本県編『熊本県史』現代編、1964年
九州・山口ブロック水試漁業分科会編『西日本海域における一本釣漁業』、恒星社厚生閣、1972年
北野典夫『天草海外発展史』下巻、葦書房、1985年
五和町史編纂委員会編『近代天草漁業史料集成』、五和町教育委員会、1996年
濱名志松編『天草海上交通史』、(自費出版)、1997年